

患者の立場を体験して得たもの

古厩 志保子

元・助産婦

最近私は患者となり、産婦人科のお世話になりました。そのときの心の動きを思いだしながら、患者の目を通したありのままを綴ってみました。

はじめて外来を訪れてみて

私は、平成 11 年 2 月に「子宮筋腫」という診断のもとに手術を受けました。

4 年位前から過多月経気味で、当時勤務していた病院で一度超音波検査を受けたのですがはっきりした所見がなく、そのままにしていました。その後現在勤務している病院に移りました。勤務先は、新棟移転で忙しい状況でした。多忙の中で、私は息切れや動悸が現われ、生理の量も多く鮮紅色となってきました。採血の結果貧血がみられ、急いで血液内科を受診し治療を始めました。

婦人科受診については子宮筋腫等も疑い、手術になるのであれば、はじめから手術を受ける病院にしようと考えていました。がん専門病院の外科系に勤務していた私は、回りの人々をあまりにも知り過ぎていたため、がんでなければお互いに気を遣い合う関係は避けたいと、他施設を選びました。どこの病院にしようかと迷いましたが、通院しやすい職場の近くで、洗濯等の身の回りの世話をお願いできる助産婦学校からの親しい友人が住んでいる近くの病院を考えました。

忙しい毎日が続きましたが、ある日年休をとって最終受付時間 10 分前に某病院に飛び込みました。受付担当の方はとても親切で、ボランティアの方々も優しく受診患者さんに対応していたため、とてもあたたかな雰囲気を感じました。

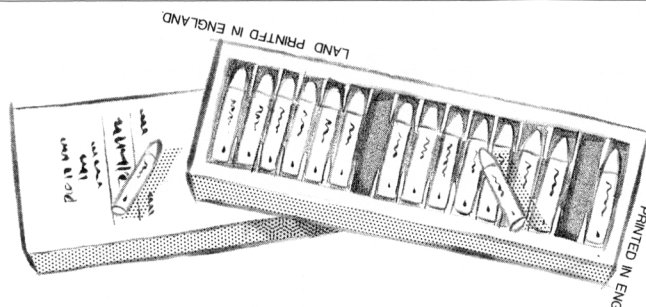
ホッとして産婦人科の外来待合室へと足を運ん

だ私は驚きました。各診療科が続く廊下に堅い長椅子がびっしりと置かれ、患者さんが待っていたのです。そしてよく見れば、産婦人科診察室出入口内側通路にも長椅子が置かれ、詰め込まれたように患者さんが無表情で座っていました。患者さんは大変なんだと思うと同時に、暗い印象を受けました。状態の悪い患者さんや小さな子供をつれている妊婦さんはどうしているのだろうと思いつつ廊下で待っていると、産婦人科の中へ入るようには呼ばれました。中に入り長椅子に座り待ちました。しばらくすると私はトイレに行きたくなったのですが、診察に呼ばれたらと思う気持ちもあり、ただ座って待ち続けました。中待ちで待っていると、診察場所の 1 つ 1 つはドアとカーテンで仕切られているのですが、医療スタッフと患者さんの対話がそのまま筒抜けで全て聞こえてしまうのです。医療スタッフの行動や態度まで手に取るように伝わって来ます。

診察が終わると患者さんは医師にお礼を言って帰って行くのでした。これではプライバシーなんでもものはない、ただ直接に診察行為が見えないだけだとショックを受けました。ましてここは産婦人科でもあり、問題を抱えて本当に困っている人は受診できないと痛感しました。その上、ほとんどの病院は診療時間も決められ待ち時間も長いいため、仕事を持っている人はお休みを取らない限り受診できないのです。

医療スタッフとの出会いと関わり

私の診察の順番が来ました。問診で医師から「がん検診も受けたことがないのか」と強い口調で



自分の健康管理の悪さを指摘されたときは、健康の維持増進を図る立場にある自分に対して後ろめたさもあり、心が痛みました。そして婦人科検診は特に羞恥心を伴う行為であり、思いやりのない医師の言葉に傷つくのは私だけではないと推察しました。

次に内診を受けることになり、我慢していた私は急いでトイレに走りました。このとき外へ出ることを伝えようとしたのですが、医療スタッフの姿が見えなかったため無断で行きました。診察に戻るなり黙ってトイレに行ったことを叱られました。気持ちちはますます沈み、私がいけないから仕方がないというあきらめに近い気持ちになりました。内診台の番号を告げられ内診台に昇ったのですが、旧式のため台が高く、また足底掛けが前側のカーテンで見えないため、台上の清潔なペーパーに片足をついてしまいました。そこで一言「ペーパーの上に足をおかないこと」とピシヤリと助産婦さんに言われ、「すみません」と思わず謝っていました。内診台の昇り降りがこんなに大変だとはい、今まで知りませんでした。

内診直後「原因がわかった、筋腫だ、これなら出血するだろう」との医師の言葉に、私は早く結果が出てよかったと思う気持ちで内診台を降り問診場所に戻ったのですが、医師は注射とMRIの予約を助産婦さんに伝えただけで、内診の結果について説明しようとはしませんでした。「子宮筋腫ですか」と私が医師に問うと、「粘膜下筋腫で、もう子宮の内面全体をおおってしまっている」と言われ、超音波検査の写真を一瞬提示しましたがすぐにしまわれたため、私は写真を見ながら納得

のいく説明を受けることができませんでした。

そして医師は薬の目的や作用の説明もないまま「ここに常備していない高い注射を打つから生理日にあわせて購入予約をしていくように。詳しい説明は次回」と言いました。回りの再診予約は4週間後でした。MRIの予約については助産婦さんから詳しく説明を受けることができ、帰宅しました。

自己を振り返って

この後、私は3回の外来通院を経て入院し、手術を受け、無事退院することができました。

助産婦経験のある私は産婦人科を受診する患者の気持ちを、同じ女性という立場もありわかっていたつもりでしたが、実際患者となってみると、わかっていなかったことに気づきました。そして病院が、ハードとソフトの両面においていかに弱者にとって厳しいところであるかも理解できました。特に精神面では、産婦人科ならではの多くの問題があると思います。

受診者側から考えれば、心身ともに弱って疲れ切っているのだから、自分に合わせた対応をしてもらうことを強く願うものです。私は、人間の出发点に立ち会うことのできる助産婦なら、個々の女性に合った対応ができると思います。自分を大切にしながら相手を心から覗けば、相手のことがわかってくるし、考えることもできると思っています。

次回は、鮎澤幸枝さんにバトンを渡します。

(ふるまや・しほこ)